

人工知能時代と身体(ボディ)の民俗学

人工知能の死を巡る儀礼を中心に

金恵仁(中央大学校)

1. 序論

2022年、我々の隣には‘人間の代理人’としてどれだけ多くの人工知能技術を搭載のロボットが存在しているだろうか？機械的な道具であることを目的に事前入力された論理回路で動くロボットの常用化が始まり、今や自ら周囲の変化を確認、直ちに学習し対応できる自律ロボットの実用化段階に入っている。物理的な実体がある人工知能ロボットだけでなく仮想現実中存在するシステムとしての人工知能が日常に普及し、人間の代理として人間と社会的な共感を分かち合う関係へと進展が本格化しながら人間社会に重要な存在となりつつある。一方、人工知能との関係が形成され拡大するにつれいつの間にか予想もしていなかった‘人工知能の故障と死をどのように扱えば良いのか？’という論議が人工知能の発達とともに看過できない問題として迫ってきている。‘人間のよう’に’関係を築いてきた人工知能の死という前例のない状況を目の前に人間が感じる戸惑いは衝撃的なことであり、一部では人工知能の死を人間と同様に、つまり葬礼を執り行うことを選ぶという現状すら見られる。これは人間と特別な関係を築き、共同体構成員の一員として認識された人工知能の死がただのON/OFF機能を利用し動きを止める機械的、物理的な死として処理できないということを示している。人間にとっての葬礼とは死後この世からしっかり死者の魂をあの世界に送り出し、この世に残された人々に再び安定した日常が営めるように哀悼の時間として、死と再生を循環させる儀礼として存在してきた。ところが腐敗する身体もなく、さまよう魂やその魂が留まる世界観さえ持たない人工知能ロボットに元々適用されてこなかった「死」に人間の倫理が転移され、人間のように死を扱うことで複雑な矛盾が生じているのだ。

本稿では身体も魂も存在しない人工知能に対し、人間と同様の儀礼が行われることが人間の共同体にどれだけ深い影響を及ぼしているのかについて1999年に販売されたソニーのペットロボ・アイボの‘廃棄’と関連し、10度目が執り行われたアイボの葬儀を通じ、親密な人の死を扱って来た人間の古い慣習が人工知能の死に適用されるメカニズムを詳しく見たい。そしてその根底に死が人類にどんな影響を与え、死の儀礼が慣習的に行われてきたのか、について二重葬や韓国の草墳を根拠に人工知能の死にいたるまで人間の儀礼が転移される文化的起因を探ってみたい。それとともに機械に対する人間の支配心理について補足しつつ、人工知能時代に行われる人間の儀礼について考察してみたい。

2. 人工知能を巡る死の儀礼

2.1 人工知能に死の儀礼を結びつけた事例- ソニーのアイボを中心に

AIロボットの擬人化の研究は“既存の文化的慣習が人間-ロボット間の社会的関係と行動の次元で深くリンクしていると思われる。¹⁾ 人工知能ロボットが生命を持つ存在として実行性を持ち、人間の日常に入り込むと、人間は人工知能に対し擬人化、人格化を行う段階に入り、²⁾ロボットという存在が持つ物理的、機械的な特性という概念を揺さぶる状況が発生する。最も代表的な事例として日本のソニーで1999年に開発された家庭用ペットロボ・アイボ(AIBO)が挙げられる。アイボは犬の形をしており学習、成長することによって行動パターンが変化し、感情や本能を有する自立的な行動ができるよう設計された人工知能ロボットのことである。1999年から2006年までに約15万台が販売されたが、2006年にソニーは販売を中止、2014年には販売する全てのアイボの保証期間およびA/Sサポート期間が終了した後は機械修理会社のA-FUNがアイボの修理を行うと発表した。ペットロボの部品がないので新しいロボットを購入するのではなく‘病気になった’アイボを治療するという概念のもと、廃棄されたアイボの一部を移植し‘故障したアイボ’を修理した。この時に廃棄され移植に協力したロボットに対し、ともに過ごした時間を振り返り感謝の気持ちを伝えるべくA-FUNの主幹で‘魂抜き’の供養儀式が行われた。2017年には100台のアイボを慰霊する5度目の葬儀が行われた。富士ソフト(FUJISOFT)の会話ロボット・パルロ(Palro)が追悼文を朗読し、僧がお経を上げる葬儀の手続きが行われ、さらに回を重ねること2021年にはアイボ60台に対し10度目の葬儀が行われた。³⁾このように人間との生活の中で深い絆を形成した人工知能ロボットの死に人間の儀礼が行われている現状が生まれており、人工知能とともに暮らす共同体の中でそれが受け入れられている。

2.2 死を扱ってきた人間の方式 - 二重葬

人間にとって死とはメカニズムとしてどう作用し、死体も霊魂もない人工知能のペットロボに人間の儀礼が何故行われることになったのだろうか？長年人間が死について持つ思考をよく示す儀式の事例として‘二重葬’を通じ、人工知能に人間の儀礼が行われたポイントについて根拠を見つけようと思う。二重葬についてロベール・エルツ(Robert Hertz)は‘死と二重葬(A Contribution to the Study of the Collective Representation of Death)’で人の死後‘あいだの期間’を経てから最終的な葬礼が行われる点について述べ、何故このような‘あいだの期間’という一次葬礼が必要なのかを説明している。死体は一時的に保管という名目で自然分解され、腐敗が進み骨だけになった後、二次的な葬礼である最終葬礼が行われる。死者が先祖の世界に送られた後、遺族たちは始めて新しい日常に戻れる。‘儀礼’とは人間のライフサイクルであり、節目をしっかりと乗り越え新たなステージへと進むために行うものであり、特に死に関する儀礼とは死という有機体の消滅が日常に大きな衝撃と恐怖をもたらすことが起因となり死者を他界へ送り出すという観念を基に長年にわたり行われてきた。⁴⁾

¹⁾ イ・ジョンズ、ユ・スンヒョン「AIロボットの擬人化研究」、韓国言論学報61巻4号、2017、P115

²⁾ イ・ジョンズ、ユ・スンヒョン「AIロボットの擬人化研究」、韓国言論学報61巻4号、2017、P118-119

³⁾ “旅立つアイボを供養 光福寺で10回目葬儀”、〈千葉日報〉、2021.06.19（接続日 2022.04.30）

⁴⁾ ロベール・エルツ「右手の優越」：死と二重葬、パク・ジョンホ訳、文化ドンネ、2021、P9

この世の人々に故人の身体的な死は直ちに死とは受け止められず、変わらずこの世の事物に属し、苦痛という過程を通じてこの世の事物と分離されることで死者と認められる状態となる儀式が行うことで生きている者が始めて霊魂が落ち着いた状態を取り戻したと判断する。これは衝撃に包まれた社会が徐々にバランスを取り戻し、故人を新たな世界へ送り出すため分離、二重の精神活動を行うことで、最終儀式を行い死の脅威やタブーが終了し死者を落ち着かせ、ようやく日常は新しい生命を得て維持することができたのだ。⁵このような二重葬が全ての人々に行われたわけではなく、子供や女性の死に対しては一時的な葬儀だけを行い、遺族も日常に早く戻った。つまり、共同体的にその役割や社会的地位が低い階層の死については長期の哀悼時間をかけるだけの死後の影響力が強くなかった、その社会に及ぼす力が弱かったからだと思われる。

これは韓国の南海および西海岸の島嶼地方を中心に記録された二重葬に属する草墳にも同じく見ることができる。イ・グァンギョ(李光奎)は“葬礼は人間の通過儀礼中で最高の関門であり、さらに人の死は残された遺族に複雑な気分を与えるのでそれが葬祭に反映されるのだ。”⁶とし、死者と遺族間に複雑な関係が葬礼に表れると述べた。草墳が行われた要因の1つには、日常を離れるまでの期間にこの世での縁が切れていない死者の死体を埋葬すると土地を汚すことになるので草墳を作り埋葬を避ける必要があった。死体が腐敗していく一次葬礼の期間中、死者の状態をしっかりと管理し死者と残された人々の間に社会的関係に危険なくしっかりと送り出すことで残された人々の一生を安定させたいという観念の表れでもあった。⁷韓国の二重葬は年少者の死亡などの場合には上記のような葬祭を行わなかった。二重葬とは人間の論理的な体系化を通じ、社会の安定を図ろうとするもので生きている者が死の儀礼を行いつつ、それがイメージする死の世界に対する概念であると言うことができる。⁸

二重葬の内容を通じ、共同体に影響を及ぼす成人の死に対する恐れを克服し、日常を取り戻すため一次葬礼で哀悼期間を持った後、二次葬礼を行い死者を先祖の世界に送り出すことで人々は再び日常に戻る過程を経てきたことがわかる。このような循環体系を通じ死とは何か理解し、受け入れようとした過去の人々の態度や死に対する観念を基に人口知能の死を処理する方法を考えてみたい。

2.3 人工知能の死を扱う方法

我々の日常の友人や家族を標榜し世に誕生した人工知能は、徐々に人間に代わる‘人間の代理人’として迫ってきている。人々はその「人間の代理人」と親密で重要な関係を築き関係の範囲が拡大するにしたがい人間の共同体内で人間のような存在と認識される状況を迎えるに至った。そして人間のような存在が病気にかかり、処分という死の状況になり人間に準ずる方法で葬儀を行い、その死を慰

⁵ ロバール・エルツ「右手の優越」：死と二重葬、パク・ジョンホ訳、文化ドンネ、2021、P66

⁶ イ・グァンギョ「草島の草墳 - 草島の葬制に関する一考察 -」民族文化研究3巻0号、1969、p 68

⁷ ジョ・ギョンマン「草墳とシッキムグッ、人間の存在と自然と社会の概念化」、民族美学11巻1号、2012、p 78

⁸ ジョ・ギョンマン「草墳とシッキムグッ、人間の存在と自然と社会の概念化」、民族美学11巻1号、2012、P1

める姿が見られる。人間は共同体、そして自分や家族の日常生活にその影響が大きく及ぶたびに長い哀悼の期間を維持してきた。そのような人間の儀礼が人工知能の死に行われることはその死をどのように扱わねばならないのか、どのように送り出せば日常を再び取り戻せるかについて人間的な考えが反映された。人工知能に対して人間の複合的な心理が適用されたのだ。これは人工知能の葬儀が単純に機械を擬人化しただけではなく、人工知能が人間社会で人間の役割に代わって遂行したことにより人間に及ぼされる感情的な影響力が増大したことを意味する。アイボの事例から見て取れるように1999年にソニーはアイボを制作したのではなくソニーのフォーム内で‘誕生’（99年販売当時のキャッチフレーズは‘ソニー製ではない、ソニー生まれである’）と生命体が誕生し人間のように生き、死を迎える世界観を内在させていたことがわかる⁹）と発表した。葬礼や出生は相互扶助的な関係であり‘誕生’すると‘死’は避けられない。人間社会で生まれ、世話を受けその中で成長し、死を迎え葬儀されるという当たり前の課題も抱えている。また、過去から我々の先祖は自らが経験したことがない死の世界に対する恐怖を人間の力で克服し解決しようと、二重の葬礼を行い多くのタブーを破らないよう守り、長い哀悼の時間を持つことで日常を再生させる循環を繰り返してきた。そんな人間にとって共同体内で互いに関係を築き大きな影響力をもたらす人工知能の死がただの機械の死ではなく「類似する」人間の死であり、このような類似する人間に身体や霊魂がないという事実はむしろ非常に大きな人類的恐怖を誘発させる。つまり、人工知能が人間のように死ぬという暫定的な死の方が社会的に受け入れ易く納得、容認された。そこで人工知能の死に対して人間が長い歴史の中で培ってきた方法である葬礼が行われたとみられる。人間が知的理解や感情を投写し、対象を理解し支配するという観点において人間の儀礼が人工知能に投写されているのだ。

3. 結論および今後の課題

人工知能の高いレベルを判別するためのアラン・チューリング(Alan Turing)のチューリング・テストで“AIが本当に思考しているのではなく、どのような思考を持っているのかを認知し判断する人間の思考がAIの思考として現実のものとして作りだしている¹⁰”ということに気づかされる。我々は人工知能の葬礼を見て1つのハプニングだと考え、血縁もない死後の世界で子孫の世話をする先祖としての役割さえ担えない機械に葬儀をするなど想像もできなかったが、そんな未来が全くないとは言い切れなくなっている。人間の道具的な存在であった人工知能が人間と心を分かち合い、人間の代理人としての役割を担うと人間は意外にも多くの認知的、心理的な問題を抱えることになった。ソニーのアイボの葬儀は2021年に10回目を迎えた。ソニーではアイボは継続して誕生させており人々は今も変わらず人工知能ロボットを日常に取り込み、喜怒哀楽をともにしている。人工知能ロボットの葬儀を行う

⁹ “SONYがペットロボット・AIBOを発売【1999（平成11）年6月1日】”，〈Rakuten Securities, Inc.〉、2022. 06. 01

¹⁰ イム・ジョンジュ、チェ・ジノ、イ・ヘミン「AIメディアと擬人化」、韓国言論学報64巻4号、2020、P7

ことになり死が人間にとってどんな存在で、どのように受け入れ扱われてきたのかについて二重葬を通じその一面を覗いた。人々は共同体内で影響力のある人が死んだ時、その死が生きている人々の日常に致命的な喪失をもたらすことを長年経験してきた。死者を先祖の世界に送り生きている人々の日常が回復するまで、死体が腐敗するまでの長い期間に人々は哀悼の時間を持ち死を悼み危険を警戒し、恐怖を鎮めた。このような哀悼と葬礼が形式的にでも人工知能ロボットに行われるのは相当意味があるものと判断される。

一方、共同体内で人間と深く関係を築いた人工知能の腐敗しない身体、靈魂の不在は人間の儀礼による死の扱いするのに問題を誘発している。人間は人間で理解しづらい神秘的な世界を人間中心に理解し、支配しようとする行為を通じて理解し受け入れている。人間の代理人である人工知能の存在はその機械的な身体とは両立できない問題がある。この時、人間は心理的な要因に重点をおき死を扱おうとする。それだけ人工知能ロボットが日常で重要な存在であるからこそ人間式の儀礼が行われているのだと判断できる。しかし、現在このような儀礼への展開もいつまで続き、これからも人工知能とより接近する日常でどのような方法でその死が処理されるのだろうかという疑問の段階に来ている。

最近では対話型チャットボット(Chatbot)が日常で人間と交流することにハードルが下がったように思われる。このように身体さえ存在しないボイスユーザーインターフェイス(VUI)基盤の人工知能、記憶や行動様式をクラウド化、機械が故障しても人工知能のメンテナンスを継続し、新たな身体に移せる現在のアイボ。死んだ人を人工知能で蘇らせる技術としての人工知能など技術の発達により人間が処理、支配できる秩序の領域外へと向かい進んでいる。人間と関係を築く人工知能のサービス終了、プログラムのダウンなどの理由により‘死体’さえ存在しない人工知能の死を人間はどのように受け入れ処理するのだろうか？次々に我々が直面する前例のない死などに対し、どのような方法で人間の儀礼を適用させるのか、これからも人間の代理人として関係を築いていく人工知能に対し準備する必要がある。

本稿では人工知能に人間の儀礼が行われる現状を二重葬に内在する死に対する人間の思考と態度を中心に詳しく見てきた。しかし人工知能に出生、死の儀礼が行われるメカニズムは死に対する人間の態度の他いくつかの要因が複合的に適用されており、多角的なアプローチが見られた。身体のない人工知能の死を扱っていく未来についての考察とともに今後の研究課題として残しておく。

参考文献

パク・ファンヨン(2020)「ハクスリーの小説『すばらしい新世界』に内在する人工知能時代の展望：身体(ボディ)を中心に」文化と融合 第42巻5号

ソン・グネ、イ・スンミン(2017)「技術進化による人間と機械の社会的関係の研究」2017 韓国技術革新学会 秋季学術大会

イ・グァンギョ(1969)「草島の草墳 - 草島の葬制に関する一考察 -」民族文化研究3巻0号

イ・サンヒョン(2018)「人工知能を生命と言えるのか？」世宗大学

イ・チャンギョ(2020)「未来はAIのものか？：人工知能と未来社会」中央大学 人文コンテンツ研究所

イ・ジョンズ、ユ・スンヒョン(2017)「AIロボットの擬人化研究：‘AlphaGo’ 報道の意味ネットワーク分析」、韓国言論学報61巻4号

イム・ジョンジュ、チェ・ジノ、イ・ヘミン(2020)「AIメディアと擬人化：AI音声対話型エージェントの擬人化の評価尺度開発研究」、韓国言論学報64巻4号

ジョ・ギョンマン(2012)「草墳とシッキムグッ、人間の存在と自然と社会の概念化」、民族美学11巻1号

畑中 章宏 「アイボの慰霊とザギトワへのご褒美」、Japan Forbes(<https://forbesjapan.com/articles/detail/20460>)

師 茂樹(2017) 人工知能を有情と見なすことは可能か、日本仏教学会

ロベール・エルツ(Robert Hertz)(2021)「右手の優越」：死と二重葬、パク・ジョンホ訳、文化ドンネ

“旅立つアイボを供養 光福寺で10回目葬儀”、〈千葉日報〉、2021.06.19

<https://www.chibanippo.co.jp/news/local/803204>、(接続日 2022.04.30)

“SONYがペットロボット・AIBOを発売【1999（平成11）年6月1日】”、〈Rakuten Securities, Inc.〉、2022.06.01

<https://media.rakuten-sec.net/articles/print/37411>、(接続日 2022.06.10)

SONY aibo, <https://aibo.sony.jp/>、(接続日 2022.06.01)

A-FUN, <https://www.a-fun.jp/>、(接続日 2022.05.02)

(翻訳責任者：澤井亮佑)